

「会話における非言語コミュニケーションの役割」の教育 —掲示板を利用したテレビドラマの分析をとおして—¹⁾

久保田 真 弓
(関西大学)

Teaching “the Roles of Nonverbal Communication in Conversation”:
Based on the Analysis of TV Dramas Placed on an Electronic Bulletin Board

KUBOTA Mayumi
(Kansai University)

Abstract. The purpose of this study is to suggest the usefulness of an electronic bulletin board in order to teach about the close relationship between verbal communication and nonverbal communication. 284 undergraduate students were asked to view 7-8 minutes of a TV drama placed on an electronic bulletin board and first write down all of the verbal communication observed and next write the nonverbal cues along with the verbal conversations with their assigned group members by using an electronic bulletin board. Then they wrote 2 page long reports about the characteristics of nonverbal communication and the relationship with the verbal communication as well as comments about the electric bulletin board. After submitting the reports, they were asked to answer questionnaires about the usefulness of the tasks. The results reveal that this method is useful to let students realize about implicit communication by focusing on the various roles of nonverbal communication. The dramas especially make it easier to follow people's 'likes and dislikes' dimension, and the students could find various functions of nonverbal communication such as slight changes in facial expressions, eye movements, tone of voice depending on a person s' mood, different expressions used in public and private, degree of a person s' anger and so on. Regarding the use of the electric bulletin board, 20 positive points and 16 negative points are listed and discussed. The statistical analysis of the questionnaires proved the validity of the contents of the drama, the length and so on. Based on these results, the positive use of an electronic bulletin board to teach the importance of nonverbal cues in relation to verbal communication is presented.

1. はじめに

コミュニケーションについて教育する際には、コミュニケーションを言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションに大別して取り扱うことが多い。そして非言語コミュニケーションとしては、その分類や機能を紹介し、それらを順次取り上げ、説明していく（古田・石井・岡部・久米、1996; 八代・町・小池・磯貝、1998; 末田・福田、2003; プリプル、2006）。その際、写真や動画などを適宜使用して、非言語コミュニケーションの役割を説明することはあるが、ダイナミックに変容する言語と非言語メッセージの関係を大教室での一斉授業でどれほど扱えているかは疑問である。Knapp（1999）は、非言語コミュニケーションの授業において、人間の相互行為を部分に分けて取り上げ教育することの意義を認めつつも言語と非言語がいかに密接に関連して作用しているかという視点を必ず取り入れるよう指摘している。

そこで、本稿では、手軽に利用できるようになったインターネット上の掲示板にテレビドラマの一部をアップし、課題として大学生にそれを視聴させ、言語と非言語メッセージの関係を分析させることで非言語コミュニケーションの役割を理解させる授業実践を検討する。具体的には、アップした7、8分のテレビドラマの分析を通して大学生が、言語と非言語コミュニケーションの関係で、特にどのような部分に着目しコミュニケーション行動を解釈しているかを調査するとともに、会話における非言語コミュニケーションの役割を教授する一案としてインターネット上の掲示板利用が有効であることを提言する。

2. 言語メッセージと非言語メッセージの関係

マレービアン（1986/1981）は、ノンバーバル・ビヘイビア（非言語の行動）という呼び方をせず、インプリシット・コミュニケーション（暗示的なコミュニケーション）という用語を積極的に使っている。その理由として、ノンバーバル・ビヘイビアという用語は、言語に対する非言語と非常に限られた意味で用いられており、その意味するところは、顔の表情、手や腕のジェスチャー、ものごし、姿勢、身体や脚、足の部分などの動きになってしまうからであると説明している。マレービアン（1986/1981）は、むしろこのような言語に対する非言語の行動に着目するのではなく、意志伝達における暗示的な部分、すなわち話者の感情や態度など言葉で表現できる内容を超えた部分、または表に明確に現れない部分に着目することを提唱している。そして、すべての感情的な反応は、「快—不快」、「覚醒—不覚醒」、「支配—服従」また、これらの組み合わせから推測できる「好意—嫌悪」の4次元で説明が出来ることを論証した。なかでも以下の Mehrabian（1968）の法則がよく知られている。

感情の統計＝言葉による感情表現＋声による感情表現＋顔による感情表現

7%

38%

55%

(Mehrabian, 1968, p.108)

この等式は、言語7%に対し非言語で表出できる割合が93%を占めることを示すが、話者の「感情(快感、覚醒、支配)と、好意-嫌悪とに限られている」(p.101)点は、注意しなければならない。つまり話者の感情を伝達するには、顔の表情、声の調子、そして言葉の順に重要であることを示しているのであり、すべてのコミュニケーションにおいて非言語による表現のほうが言語によるものより重要で着目すべきであるという意味ではない。「あした5時に会おう」などは、言葉で正確に伝えなければならないのは明らかである。したがって非言語行動を分析するには、文脈に関係なく拾い上げるのではなく、会話を追い話者の心情の変化や人間関係、状況等を理解したうえで解明することが必要となる。

また、言語コミュニケーションがデジタルであるのに対し、非言語コミュニケーションはアナログと説明されるように(ワツラヴィック、バヴェラス、ジャクソン、1998/1967)、非言語は、身体動作のように連続的に表出できるところに特徴がある(久保田、2001)。それゆえ連続的に表出される顔の表情の解釈など言語に比べ解釈も多義的になり、あいまいになることが考えられる(Knapp, 1999)。言葉であるシンボルは、音声や書き言葉で伝達するため聴覚や視覚の一チャンネルを使って主に伝達するが、非言語は、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚の五感に同時に訴えることができるので、マルチチャンネル性という特徴がある(八代他、1998)。

このように非言語コミュニケーションで伝達できるメッセージは、シンボルで構成される言語メッセージより広範囲のサインで表現でき(Cronkhite, 1986)、アナログの特性の他、「マルチチャンネル性」、「あいまいさ」、「直接伝達性」、「非意図性」(八代他、1998)の特徴を持つ。さらに、文化特有のものや文化的に普遍のものもある(Ekman & Friesen, 1969)。

非言語コミュニケーションについて教える際には、これら非言語コミュニケーションの特徴を押さえ、例えば、ナップ(1979/1972)による7分類「動作行動」「身体的特徴」「接触行動」「準言語」「近接学」「人工品」「環境要因」とホール(1966/1959)の「時間学」を紹介し、説明していくことになる。また、言語と非言語コミュニケーションとの関係としては「反復」「矛盾」「代用」「相補性」「抑揚」「関係付けと調整」の6種類(Ekman, 1965)のうちいくつかを取り上げることとなる(ナップ、1979/1972; 古田他、1996; 八代他、1998; 末田・福田、2003; プリブル、2006)。

そこで、本稿では、このような非言語コミュニケーションの特徴を捉え、さらに言語コミュニケーションとの関連を履修者自身が分析し、それを通して履修者に会話における非言語コミュニケーションの役割について考えさせることが狙いである。それを授業外の課題としてインターネット上の電子掲示板を利用することで可能となることを示す。

3. 研究方法

K大学S学部には、選択必修科目の一つに「コミュニケーション論1」がある。これは、主に1年生を対象に春学期(13回)に開設されている科目である。²⁾本研究では、2006年度にこの科目で指示したレポート課題を研究対象とする。2006年度の履修者は、総数で

284人であり、その内訳は、1年生216人、2年生27人、3年生19人、4年生8人、5年生以上11人であった。その中には、留学生3人も含まれている。男女比は、男性187人、女性97人である。これらの履修者を対象に授業を行い、およそ一ヶ月後にレポート課題を出した。なお「コミュニケーション論1」の全体の評価は、このレポート課題が30%、授業中に抜き打ちで5回実施する小課題が20%、授業終了後の定期試験が50%である。レポート課題の採点については、Knapp (1999) の観察レポートの評価 (p.165) を参考に、レポート課題の質問に対する回答になっているか、期限までに提出したかどうかという完成度で、3段階に分け評価している。

レポート課題では、授業外の時間に指定されたインターネット上の掲示板にアクセスし、3週間という期限内で課題に取り組み、指定日に課題を提出することとした。その準備として、まず6種類のテレビドラマの一部を7、8分にカットし、インターネット上の掲示板にアップした。次に、284人の履修者を学籍番号順に20のグループに分け、掲示板にグループごとのフォーラムと視聴するドラマを一つ指定し、グループ別にすぐに課題に取り組みるようにレイアウトした。そして、授業中に履修者に、レポート課題として、掲示板のテレビドラマを視聴し、会話を書き起こしし、気がついた非言語行動をメモすること、そして、それを添付資料とするほか、本文に1) 分析を通して気がついた言語行動と非言語行動の関連の考察、2) 掲示板利用の感想、を書き、レポートとしてまとめるよう指示した。また、グループ内で自己紹介した後、会話の書き起こしや非言語行動のメモ書きなどを役割分担して取り組み、意見交換することを奨励した。掲示板の利用は、3週間とし、その後、A4版で2枚(表紙と非言語行動を併記した会話の書き起こしは別に添付)のレポート形式で事務所に提出させた。会話の書き起こしには、G. ジェファソン及び西阪(1997)の会話分析の事例をプリントして授業中に配布し、通し番号のつけ方、沈黙や間などの記号のつけ方などを参照させた。視聴のために用意したテレビドラマは、「ビューティフルライフ」「渡る世間は鬼ばかり」「コシノ三姉妹物語」「Dr. コトー」「芋・たこ・なんきん」「相棒」の6本である。

さらに、レポート課題の締め切り後に行われた最初の授業で、その授業日の出席者を対象に課題の取り組み方について質問紙調査を実施した。質問紙では、「掲示板」「グループ作業」「課題のビデオ視聴」について5件法で22項目聞いたほか、掲示板の使用経験、ビデオ視聴回数等を5項目加え、最後に自由記述で意見やコメントをもとめた。

本研究の分析には、履修者が提出したレポート課題と添付された資料および質問紙調査結果を使用する。分析方法としては、KJ法を用いてレポート課題の部分を分類した。なお、履修者によっては、添付した会話分析の会話番号を参照して説明しているのが適宜その部分も含めて内容を分析した。添付された資料に関しては、グループごとに若干の違いはあるものの会話の書き起こしは、共有されているため非言語行動の記述に着目した。なお、本研究では、グループごとに掲示板を利用し意見交換することも奨励しているため、ここでは数量的にまとめることが目的ではなく、履修者が自由に組み込んだレポートの中でのような内容が優先的に取り上げられたのかに着目することにする。

4. 結果と考察

4.1. ドラマの特徴

授業履修者は、284人だったが、レポート提出者は、214人（内訳：1年生184人、2年生24人、3年生2人、4年生2人、5年生以上1人；留学生1人含む；男性132人、女性82人）だった。その結果、分析の対象となるグループ別の人数は、表1のような結果になった。

また、6種類のテレビドラマのシーンの数とショットの数、及び視聴させたドラマの長さは、表1のとおりである。ドラマの長さにはばらつきがあるのは、なるべくコマーシャルをはさまず、かつ途中から見てもわかる内容で、2者の会話を中心となるようにカットしたからである。

表1 ドラマの特徴と視聴人数

	視聴した学生数/ グループの数	時間（分：秒）	シーンの数	ショットの数
ビューティフルライフ	49/ 4	7：57	3	62
渡る世間は鬼ばかり	36/ 3	7：32	3	73
コシノ三姉妹物語	36/ 3	7：58	5	81
Dr. コトー	29/ 4	7：08	9	101
芋・たこ・なんきん	38/ 3	6：46	9	43
相棒	26/ 3	7：04	4	31

ドラマは複数の映像をつなぎ合わせて作成されている。ドラマのストーリーを構成している映像の最小単位を「ショット」といい、いくつかの「ショット」をつなぎ合わせて一つの「シーン」が作られている（久保田・中橋・岩崎、2008）。そのように作成されたドラマから非言語のメッセージを読み取る際に、「ショット」で会話中の2人の顔が交互に写されれば、おのずとその顔の表情を読み取ることになると考えられた。それは、日常のコミュニケーションとは異なる現象で、注目する部分が「ショット」で促される可能性があるのは、コミュニケーション分析にテレビドラマを使用する際の限界のひとつである。そこで、あらかじめ6種類のテレビドラマのシーンとショットの数を表1のように調査した。その結果、ドラマによって一回のショットが長いものから短いものまでさまざまであることがわかった。また、ショットでも必ずしも話者の顔がアップで写されているわけではなく、体全体が写っているフルショットなどさまざまであることがわかった。

したがって、ショットによっては、視聴先を誘導している可能性はあるが、6種類ものさまざまなドラマを用意したことにより、それによる影響は、少ないと考えられた。

以下に簡単に各ドラマの特徴をまとめておく。

1) ビューティフルライフ

終二と車椅子の杏子との会話で前半はファミリー・レストラン、後半は車中のもので

ある。同じ2人の会話が続くので場面による比較が可能となっている。

2) 渡る世間は鬼ばかり

一回のせりふが長いため、その長いせりふの中での感情の変化と非言語の関係が読み取れる。登場人物は、複数出てくるが、みな家族や親せきであり固定的である。

3) コシノ三姉妹物語

時代が昭和30年代で他のドラマより古く設定されている。母親が、子どもたちに本音で語らない場面があり、変化する母親の気持ちと非言語の関係が読み取れる。

4) Dr. コトー

シーンとショットの数がともに一番多い。それだけ会話のシーンでは、話者二人の顔や姿が画面の中心に位置し、交互に映し出される場合が多くなっている。

5) 芋・たこ・なんきん

健次郎、町子、春子という親子の会話を中心にした日常生活が描かれている。喜怒哀楽がはっきりしているので内容が追いやすいうえ、関西弁が関西人には親しみやすい。

6) 相棒

一番ショット数が少なく、その分一回のショットの時間が長い。刑事右京と薫が部屋の中を探索する際など、カメラは、人の動きに合わせて視線を追うように撮影している。

4.2. ドラマごとの非言語行動分析の結果

表2は、課題を提出した214人がレポートに添付した会話の書き起こしと非言語行動の記述から、筆者が非言語行動部分を取り上げ数えた非言語行動の延べ数をドラマ別にまとめたものである。

履修者は、掲示板上で会話の書き起こしと非言語行動の記述を共有するよう奨励されているため、グループごとにおおよそ同じ会話文と非言語分析結果を提出している。しかし、グループによって取り組みの期間、リーダーの有無、役割分担の機能が異なるため、多少の差がある。たとえば、非言語の表情、視線、間・沈黙、身体動作など役割分担を早々に決め取り組んだグループは、詳細な分析ができています。しかし、ここでの狙いは、履修者がドラマを視聴し、気づいた非言語行動の要素の種類に着目することであり、各個人の非言語メッセージの解読の力を評価するものではないので、ドラマごとに数グループが取り組んだことで目的は達成されたと思われる。

ではまず表1のショット数と表2の結果とを比較してみよう。ショット数が多かったDr. コトーやコシノ三姉妹物語の非言語メッセージ数がショット数に比例して多いかといえば、そのような結果にはなっていない。これは、たとえショット数が多くても会話中の話者の顔のアップが写されただけだと、それしか見ることが出来ず、他の手足や体全体の様子、環境との関連などが自由に見られないので、非言語に関する気づきも限定されてしまうからかも知れない。一方、ショット数が一番少なかったサスペンスでは、人の動きを追うようなフルショットが多かったため、自由に非言語メッセージを拾い、結果として

非言語メッセージの総数が一番多くなっているといえよう。したがって、再度記述するが、6本のドラマのショット数の違いが、非言語分析に大きな影響を与えたとは言えないだろう。なお、履修者には、会話との関係で非言語メッセージを記述させており、ショット数との関連では、分析させていない。

表2 ドラマ別非言語行動の数

	ビューティフルライフ	渡る世間は鬼ばかり	コシノ三姉妹物語	Dr.コトー	芋・たこ・なんきん	相棒	合計
表情	6	39	9	11	27	39	131
視線	36	6	36	34	49	53	214
沈黙・間	6	51	5	5	38	8	113
うなずき	4	3	3	4	44	14	72
ため息等	1	1	3	1	2	5	13
笑い・笑み	0	9	22	13	4	9	57
声	1	5	10	6	0	4	26
動作	44	7	51	32	25	43	202
近づく等	0	1	3	4	1	4	13
指さし	3	0	3	5	0	9	20
姿勢・向き	12	9	18	2	7	16	64
接触	1	0	1	11	1	0	14
環境	2	0	7	0	1	0	10
表象	0	2	1	2	0	4	9
服装	0	0	1	0	0	1	2
合計	116	133	173	130	199	209	960

表2の結果から、履修者は、ドラマの内容に沿って視線214項目、動作202項目、表情131項目、沈黙・間113項目、について主に非言語メッセージを記述し、考察していることがわかる。さらに、うなずき72項目、姿勢・向き64項目、声26項目、などを挙げ、総計960項目記述している。第2節で述べたとおり、非言語の分類では8種類あるが、会話との関連で着目する非言語メッセージは、身体動作、そのなかでも体の動きだけでなく表情や視線行動、姿勢や向き、そして沈黙・間、うなずきなどの周辺言語が主だといえよう。また視線や沈黙・間は、特に取り上げて着目したグループでは、分析が詳細になっていることがわかる。

4.3. レポート課題の分析結果

以下にレポート課題の分析結果を示す。分類の命名は筆者が行ったが、履修者の言葉を

「 」で引用することで一部を例としてあげることにする。

各見出しのあとの（ ）内の数字は、同意見をレポートで取り上げ記述している履修者の数であり、多様な着眼点があることを提示するために記す。引用文の後の（ ）内には、識別番号、班番号、視聴したドラマの略称を順に付記する。前述の通り6本のドラマによる場面の特徴があるためドラマによって観察可能なものが異なる場合もあるので参照してほしい。

4.3.1. 従来の非言語コミュニケーションの特徴

履修者は、第2節であげた非言語コミュニケーションの特徴についておおむね捉えることができている。

1 マルチチャンネル性 (16)

「箸と茶碗を音をたてて置くというのと怒っている表情の非言語の2種類が同時に働いている。」(6-4、三姉妹)「コミュニケーションというものは、身体の細部にいたるまですべてのパーツをつかって表現している。」(5-11、芋)など身体動作、表情、視線、声のトーン、2者間の距離、うなずき、沈黙・間など多チャンネルで伝達していることに気づいている。

2 直接伝達性 (26)

「非言語によって、相手に伝えようとしていない行動も良くも悪くも相手に伝わってしまうことがあることがわかった。言葉では思っていることと違うことを言っている場合もあるが、非言語では顔の表情や仕草などから、心からの感情が素直に現れている気がする。」(2-4、渡る世間)と非言語は言語より雄弁で「素直な気持ち」を表現していることを取り上げている。

3 感情の表出 (19)

「表情と沈黙が非言語の中で、いちばん言葉に近いものだと考える。表情にいたっては、言葉よりも素直な心情が現れていると思う。会話を文字だけでみると映像で見るとよりわかりにくいものだなと思った。」(6-5、ビュー)と顔の表情に感情が表出していること、さらに「先に非言語で表情などを表現した後に言葉でしゃべっていることがわかる。」(3-14、芋)と言語より非言語での表出が先に出現することに気がついた者もいる。

4 意図性 (6)

「発言しにくい時には会話以外の動作が増えているように思う。水を飲む。私もすることがある。いましゃべれない状態だから返事返せないんだよという意味で。」(8-2、ビュー)「非言語は自分の意図を示すときには欠かせないものだと思います」(7-13、相棒)また「あえて感情を態度に出さないように振る舞う。」(9-7、三姉妹)など意図性について指摘

している。

5 意識の有無 (19)

「電話をしているときに、人間は相手に見えていな声のみのコミュニケーションにもかかわらず、お辞儀をしたり、身を乗り出したりしている。このことから本心は、相手に見えているかどうかにかかわらず、無意識の行動として出てくるが多かった。」(9-15、コト) 電話でのお辞儀は、無意識の行動の典型で、これを「日本人らしい」と特徴づけている者もいた。

4.3.2. 従来の言語と非言語メッセージの関係

第2節であげた言語と非言語メッセージの関係で履修者が取り上げたものを次にまとめる。

1 反復 (19)

「指差し、あごで指すことなど動作としてはとても単純なことです。僕はこの動作は、誤解の軽減につながると思う。言葉と同時に、その対象物を指差す事をすれば、求めているものをすぐに、またかなりの確率で、間違えずに取ってくれる。つまり言語は、言語、非言語と分けて使うよりも、組み合わせることで誤解を減らし、自分の意図を正確に伝えられると思う。」(1-2、ビュー) 言葉に非言語メッセージを添えることで「誤解を軽減する」ととらえている。

2 矛盾 (19)

「もしかしたら神様って本当にいるのかもしれないね。」と、とても明るい実際の表情は少し暗くみえる。この場合、本当の心境を表現しているのは言葉そのものより非言語である加津の表情であるだろう。非言語に本当の気持ちや考えが出てしまうのではないかと思う。」(11-3、渡る世間) と言語と非言語の不一致を指摘している。

3 代用 (11)

履修者 (9-2) は、会話の代わりである非言語を「会話非言語」と定義し、ファミリー・レストランの場面でメニューを受け取りオーダーする一連の流れで「会話非言語は店員と話すときに多く表れる。会話の代わりに使用されるため、言語による会話がかなり少ない。」(9-2、ビュー) と述べている。

4 相補性 (34)

「非言語でも、視線や沈黙、話す速さの声のトーン、動き1つで感情に違いが出るということに改めて気づいた。言語だけでは気持ちが伝わらず、言語と非言語の両方があってこそ、本当の気持ちが伝わるのではないかと思う。(略) 言葉だけでは信憑性にかけるように

思う」(12-5、ビュー)と言語と非言語が互いに重要な関係であることを述べている。

5 抑揚(8)

「『ふっ、お前にもかわいい時代があったんだねえ〜』ちょっと変わった音調で言ったので、ほめているか、わらっているか両方にも聞こえる。これはただ言葉の意味から見て、わからない、声の質、音量、速度、口調、抑揚、息のはき方などから総合判断して、わかる。話す内容ではなく、「話し方」の方法のこと。」(1-19、相棒)と声の抑揚に着目している留学生在がいた。

4. 3. 3. あらためて気づいた非言語コミュニケーションの特徴

次に履修者が各自の視点であらためて気づいた点をあげる。

1 非言語だけで成り立つ会話(16)

「町子さんの原稿が半分も仕上がっていないと漏らした声を、小耳に挟んだ編集者とのシーンだ。二人は挨拶をかわした後、目を合わせて気まづい困惑した表情で目をそらし、お互いが下を向いて大きなため息をついていた。(略)少しの時間だが、非言語だけで会話が成り立っていると感じた。」(5-17、芋)「資料9:シートにうなだれることで、だるい感じがした。時には言葉で言うよりもきつく感じることもあることに気がついた。」(9-5、ビュー)と非言語メッセージの威力を改めて知り驚いている。

2 相対する人以外へのメッセージ伝達(2)

声は周りにも聞こえるので、会話の相手に向けて話している言葉は、実は、そばにいる第三者に向けての暗示的言葉であることが、人間関係やそれぞれの視線や顔の表情等の非言語でわかる。「資料番号53の五月の会話の後、眞が、一度勇を見ている。このことからこの五月の会話は、眞に向けて言われているように見えるが、実は勇に向けて言われているか、勇に何らかの関係があると思われる」(3-6、渡る世間)

3 詳細な顔の表情の読み取り(4)

「たった8分間の間に様々な表情が出てきた。嬉しそうな表情や怒っている表情などの割と単純なものだけでなく、不思議そうな表情や困惑している表情、言葉では表しにくいような表情もあった。」(8-4、三姉妹)そのほか、添付資料には「表情は険しいまま」「嬉しそうな表情」「少しあきれ顔」「思い出したかのような表情」「真剣な表情」「自信のある表情」「清々しい表情」「不思議そうな表情」「少し険しい表情」「当惑した表情」「おどけた表情」「驚きの表情」など(1-19の資料より、相棒)のように表現している。表情を文脈にあわせて解釈したからこそ顔の表情の読み取りが細かくなっている。

4 非言語メッセージ分類の細目化(6)

「非言語コミュニケーションとは手振り身振りやジェスチャーのこと」程度に理解してい

た履修者がレポートでは、「表情、動作、語調、声量、沈黙、途切れ、引き伸ばしなど、非言語を私は人生において、大切にしていきたい。」(2-9、渡る世間)というように非言語行動の分類を細かくあげて表現するようになっている。

5 パターン化した行動の抽出 (13)

文脈と会話文との関連で非言語のパターンを抜書きし解釈している。「これ、それ等の指示語には指をさす動作がつく。相手に確認をする疑問文には、相手への視線がつく。相手に説明をするときはよく手が動く。考え込むときには空(くう)を見つめることがよくある。」(6-13、相棒)。この履修者は、疑問文に視線がつくのは当たり前なので取り上げるのを躊躇したが「相手への視線がつかない確認の疑問文もビデオの中にはあり、その相手への視線がつかない確認の疑問文は独り言・もしくは自分自身に確認しているように見えました。」と気づき、あえてこのパターンを取り上げている。

6 人物の癖や性格 (11)

服装、眼鏡、髪型、年齢などのような身体的特徴の違いのほか「亀山は感情が顔に出やすく、話しながら手など特に意味もなく動かす、笑ってごまかしたり、どこか注意力散漫な気がした。(略)杉下は、自信があるから、いいよどみや無駄な手の動きがほとんどないと思った。(略)だいたい的人物像が読み取れると思った。」(10-13、相棒)また、「沖島は鼻をすすることが癖のようだ。」(10-5、ビュー)と非言語から登場人物の特徴や癖に言及している。

7 環境要因 (9)

「5つの場面展開をしっかりと理解するのに非言語の役割は重要である。言語の強弱、アクセント、間合、感情、場面など言語では表せない非言語もあってこそ、初めてすべての場面を把握できるのではないかと思う。場面によって変わる服装も重要な非言語。(略)大木さんは、職場ではスーツを着てなかったが酒場ではスーツを着ていた。洋子の赤のワンピース。朝食時の制服など。」(3-7、三姉妹)「たらいで洗濯物をしている。時代を感じる。」(4-14、芋)などドラマでは、場面展開、時代背景、人物の心情、時間帯などをさまざまな小道具や効果音、服装等で表していることにあらためて気づいている。

8 予測した非言語行動の無出現 (6)

非言語行動は、習慣化したものも多く、次の行動を予測することが出来るが、それが無いときの意味を解釈している「信号が青でも発信しない。行動を起こさないことから後悔や戸惑いというものが感じられる。言語はなく、行動を起こさないために、非言語もないように見えるが、動作がないことが逆に非言語となっている。」(1-8、ビュー)「診察の場面でコトーのほうにたくさんの人が並んでいて、仲衣のほうにはいない。腕前は信頼されていないのが明白に分かる。」(2-12、コトー)

9 1つの非言語で伝達される2つ意味（4）

「非言語では1つの行動で、2つの意味をこめることができる。喜んでいることと感謝していること。」(3-6、渡る世間)のように非言語メッセージの意味は、ひとつではないときがある。「資料59でヒロコから東京で勉強したいと言われ、アヤコがしばらく黙る場面がある。これは先ほどの真意を伝える間とは違い、ヒロコの言っていることを理解しようと考えている間である。その間により、言っている意味がよくわからないということも伝えている。」(7-4、三姉妹)

10 異なった解釈（11）

ドラマ全体の流れを知っている者と知らない者では、登場人物の性格や人間関係の解釈そのものが若干ずれることがあるため、非言語の捉え方も異なることがある。「意見交換で意見が一致したもの、意見が一致しなかったものがある。例えば、デコピンは、だまらせる効果か、人を怒らせる効果か。」(3-7、三姉妹)「資料103のせりふ: 声のトーンを少し上げていったので、これ以上けんかをしないためにも、ここで話を切り替えたい、という気持ちを込めていったのだと思っていた。しかしこのせりふから、「同情されたくないと言いつつも、少し同情して欲しいのではないか」。「杏子はここで開きなおったのではないかと、全く考えていなかった意見が出た。」(7-10、ビュー)

11 相手の注視による効果（3）

「ビデオでは五月の笑顔を見るだけで、真たちは五月が家からどこにも行かないという安心感を得ているように感じることができる。しかし、相手をよく見ているときにしか、この非言語は伝わらない。その分しっかり見ているときには言語を使わなくても、相手に自分の伝えたいことを言語を使うより効果的に伝えることができると思う。言葉で言い表せないとき非言語を使えば、うまく伝えることが可能だ。」(11-9、渡る世間) 視覚に訴え伝えるには、相手が見ていることが前提となる。

4. 3. 4. 動的に変化する非言語メッセージに着目

さらに履修者は、ドラマの流れに応じて変化する人物の心情に沿って非言語メッセージを読み説いている。

1 意見変容を知る手だて（3）

話している間に同一人物の意見が変わる場合、その変化は、言語だけでなく、非言語でも伝わっている。「加津は、最初はとても嬉しそうな顔であったが、話が進むにつれ、戸惑いの顔つき、そして怒りの顔つきになっていく。眞は、何かあったのか、というような顔つきをしている。」(7-6、渡る世間)。

2 会話内容に連動した視線の動き（10）

「とくに口論が激しくなるにつれ、相手が自分に視線を向けると同時に、自分は外を見るという行動まで現れる。これは自分は怒っているのだということを伝えたいという行動と読み取れる。さらに激しい口論になった時の視線に注目すると、あちこちに視線をさまよいつながらも、自分が伝えたいことがあるときは相手の方を見ている。一方で、相手の発言に対する返事や言い訳の時は、外に視線を向けていることが多い。」(11-2、ビュー)のよう同じ2者の会話でも口論が激しくなるにつれ視線行動も変わっていることを指摘している。

3 心情と姿勢の変化(2)

「体の動きが、視線のときと同様に暗いときは背中が丸くなっていたのに対して、明るくなるにつれて姿勢がよくなってきたり、全体的な動きの速さや大きさにも変化があったように思えた。」(1-9、渡る世間)と会話内容に伴って変化する身体全体の動きにも着目している。

4 対人距離と親密度(5)

「仲衣と少女は、はじめはものすごく離れていて、その次に、ある程度の距離感を持ったまま2人の会話が始まり、最終的に耳でこそこそ話しをするまで仲良くなる。次第に距離感が縮まることは、しだいに仲良くなったことを表している。」(2-12、コトー)と、登場人物の心情にあわせて、2人がとる距離の変化を見ている。

5 公的空間と私的空間の比較(6)

「杏子が運転しているため2人とも身体動作はほとんどない。お互いに顔の表情や声の大きさ、相手の顔を見るなどしてやりとりしている。そして、2人しかいない空間にいるせいか、杏子も先ほどより声を出し、表情もはっきりしています。柘二も、声を荒げたりしています。」(4-2、ビュー)と前半の公的空間であるレストランの場面と私的空間である車中とを比較して非言語行動の変化を指摘している。

6 怒りの度合い(11)

怒りの感情に着目して観察することにより、怒りが強くなるにつれ、会話の間が短くなり、直接物に当たることが多くなっていることを発見している。「加津のセリフ『母さんなんて勝手にしたらいいんだ。(1.0) ↑何があったってもう知らないから!』である。この二文のセリフはどちらも怒りを表しているように思える。そこでビデオを見てみると確かに怒りを表しているのだろうけど、怒りの強弱がまるで違うことがわかる。前半の部分の『母さんなんて勝手にしたらいいんだ』では、悲しみの中に怒りが含まれていることがわかるが、後半の部の『何があったってもう知らないから』では、悲しみという感情はほとんど見えずほとんどが怒りで、声も大部荒げた感じで、手に持っていた荷物もかなり乱暴に箱の中へ投げつけていた。怒りの強弱が前半部分よりも後半部分のほうがより強いことが

確認できる」(8-3、渡る世間)

4. 3. 5. さらに発展した履修者の取り組みと感想

1 発展的取り組み (21)

実験的に親や友人に音声を通してドラマを見せ、感想を聞いてみた者、自分で先に文字だけを読んで場面を想像してみた者がいる。レポートとしては課されていないが、自発的に試み課題に関連させて考察している。

さらに、1) 課題でわかったことを電話や携帯メールと比較する、2) ニュース原稿を読むときとバラエティ番組とで比較する、3) アルバイト先の喫茶店での体験と関連させ自分の行為を振りかえる、4) 視覚障害者の立場で考える、などを通して考察を深めている。

2 ショットからの考察 (1)

ドラマの登場人物からの視点ではなく、ショットを利用した見方をしている履修者がいた。「顔だけがクローズアップされるシーンがよくあるが、そのときに人はその人物の目を見てその場面を判断しているはずである。」(3-17、芋)。映し出された顔の表情全体ではなく目に着目するという指摘である。

3 履修者の感想

一番多かったものは、「想像以上に非言語を多用している。」(4-7、三姉妹)「話す言葉より非言語が圧倒的に多い」(2-16、相棒)という気づきだった。そのほか、言語と非言語は、TPOで、刃物にもクッションにもなるものだと言った。」(5-2、ビュー)とも表現している。

「感想: 言葉以外の伝達方法って、言葉よりも強い意味合いを相手に感じさせる傾向になるなって思いました。人間はしゃべるというコミュニケーションが地球上で1番発展している種族であるので、つついそれに頼りがちになるが、必ずしもそれがいちばん良い選択肢ではないということが分かりました。現に、他の動物たちは、仕草などで相手と、意思疎通を何不自由なくしているのだから、人間も仕草やジェスチャーというものが、いちばん強いものに決まっています。でも、それに気付かなかった自分は、言葉というコミュニケーション能力に、慣れきっているんだなって痛感しました。」(1-15、コトー)

4. 3. 6. レポート課題についてのまとめと考察

ドラマを利用して非言語コミュニケーションを分析する利点は、登場人物の人間関係や心情の変化を捉えたうえで解釈できることである。単にドラマを鑑賞するのとは違い、結末も分かたうえで繰り返し視聴できるので、かなり正確に心情の変化を読み取りながら非言語メッセージを解読していくことになる。このような分析をすることによって履修者は、まず、非言語行動の多種多様さに驚き、非言語行動の占める割合の大きさに気付く。

これは、非言語メッセージは言語によらないものとこれまで理解し、単に身振り手振りで伝えること、手招きのようなジェスチャーのことなど「非言語」という言葉から単純に類推して限定的に捉えていたからである。

第4.2節と第4.3節で示した通り、履修者は、さまざまな顔の表情のほか、咳払い、ため息、沈黙、声の強弱、間、舌打ちなどの周辺言語、さらに、指やあごで指し示すイラストレーター (Ekman & Friesen, 1969)、視線の他うなずきやあいづちで会話を制御するレギュレーター (Ekman & Friesen, 1969) の役割にも気が付いている。特に顔の表情はアフェクト・ディスプレイ (Ekman & Friesen, 1969) と呼ばれる機能を持ち、前述のマレービアン¹の法則でも55%を占めるものである。その顔の表情を記述するうえで様々な表現がされたということは、観察した顔の表情を表現するのに登場人物の心情を推し測ったからこそである。また非言語メッセージだけで会話が成り立つこと、それには見ていることが前提になることに気が付いている。視覚に訴える非言語メッセージが多いことによる気付きである。さらに、身体動作に関しては、お辞儀やおでこを指ではじくデコピンなどのエンブレム (Ekman & Friesen, 1969) のほか、体の向き、立ち居振る舞いなど会話や環境要因と合わせて記述している。したがって、非言語行動のジェスチャー (履修者が捉えている) のみに着目するのではなく、この課題を通して、相手や相手との人間関係、置かれている状況、各人の心情などダイナミックに刻々と変化しているコミュニケーションにそって非言語メッセージを解釈できたといえよう。特に、ドラマの人間関係のうち「好意-嫌悪」(マレービアン、1986/1981) は、わかりやすい次元だといえよう。

人は好きなものには接近し、嫌いなものは回避する。好意-嫌悪と接近の直接的な相関関係を示すこの単純な仮説によって、人や物や、考えに接近あるいは回避する実際の動きからだけでなく、省略された行動やジェスチャーを観察することからも、好意-嫌悪のレベルを判断することができる。好きという気持ちは、遠くにいるよりは近くに来る、座っている場合、後にもたれていないで前方に身を乗り出す、相手のいない方向でなく正面から相手を見る、タッチする、相互にアイコンタクトをする、握手している時に、身体に接触する、別れを言うのを長びかせる、挨拶の時ジェスチャーを使う (遠くにいる人に近づこうとする意図を示す)、などの行為で表される。

このような省略された動きや身体の姿勢や位置は、人の好き-嫌いを推測するのに役に立つばかりか、繰り返し起こる場合は、その人の人間関係のスタイルに関する情報を与えてもいる。その人自身の行動に加えて、物理的な環境が、その人の意図に関係なく、人間関係に影響を及ぼす。(マレービアン、1986/1981、p.57、下線部筆者記入)

非言語コミュニケーションの大きな特徴としてマルチチャンネル性があり、非言語の分類を困難にさせている。例えば、登場人物2人が互いに歩み寄り、耳打ちすれば、何か秘密のこと、他人に知られたくないことだと察することができる。これが浜辺で誰もいない

のに行われていると、その環境要因が耳打ちの意味をさらに限定する。さらに2人は少女と若い女性という身体特徴をもち、耳打ちは少女からという動作がわかると耳打ちの解釈が2人の心情を含めて可能となっていく。このように言語で記述すると描写が困難だが映像では一瞬にして提示される。その際にどこの非言語メッセージに着目してレポートに取り上げるかは、履修者の価値判断による。その意味で非言語メッセージの分類は、あいまいにならざるを得ないが、169人の履修者の着眼点を整理したことによりこれまでの非言語コミュニケーションの特徴として取り上げられなかった視点を提示できたと思われる。

5. 掲示板利用の特徴

以下は、レポート課題に書かれた掲示板利用のプラス面とマイナス面のまとめである。

5. 1. 掲示板利用のプラス面とマイナス面

プラス面

- 1 多角的な視点で見られる。
- 2 新しい見方を発見できる。
- 3 考えや視点を広げられる。
- 4 意見が異なることがわかる。
- 5 解釈がほとんど同じことにも微細な違いに気づく。
- 6 みんなでやった達成感や親近感が得られる。
- 7 グループ作業に参加しているという実感がわく。
- 8 メタレベルの気づきがある。
- 9 好きな時間にアクセスできる。
- 10 時間差で見ることにより、考える時間が生み出される。
- 11 何度でも視聴できる。
- 12 結果を印刷できる。
- 13 書き起こしやディスカッションなど記録が活字として残る。
- 14 リーダーが現れる。
- 15 男女の意見の違いに気づく。
- 16 気兼ねなく主張できる。
- 17 役割分担で負担が減る。
- 18 知り合いが出来る。
- 19 他の学生の投稿で触発される。
- 20 教えてもらえる。

マイナス面

- 1 意見を書いても返信がない。
- 2 返信がすぐにこない（いつ来るかわからない）。
- 3 掲示板を見ているかわからない。
- 4 グループワークになっていない。
- 5 グループ作業に時間がかかる。
- 6 ディスカッションするのが難しい。
- 7 先輩や知らない人がいるので書き方に注意する必要がある。
- 8 意見の優劣が気になり書き込みにくい。
- 9 文字だけで伝えるのもどかしい。
- 10 書き込まなければ存在感がない。
- 11 ディスカッションに参加していなくても話がどんどん進んでいくので、人に頼る傾向にあった。
- 12 不公平感がある。
- 13 自分の意見を読み手にわかるように書くことに苦労した。
- 14 途中から参加するとスレッドがわかりにくい。
- 15 作業量が多いので自宅にパソコンがなかったり、時間がないと課題に取り組むのが難しい。
- 16 機能として、返信には、名前ではなく、学籍番号が表示されるので不便である。

5.2. 掲示板利用についてのまとめと考察

掲示板利用の一番の利点は、自分のペースでドラマを何度も視聴したり、止めながら見られる点であろう。特に会話に沿って視線や間など非言語メッセージのどれかに着目して繰り返し見ることにより、気づきが深まったといえよう。

さらに掲示板は、グループ作業に適している。非言語メッセージの分析に当たっては、会話の書き起こしや、非言語行動の記述など作業量が多いので、グループ内で役割分担することで、負担が軽減されるだけでなく、表情や視線行動など一点に着目して詳細にドラマを見ることが可能となり、考察が深められていた。

また、同じように非言語を抽出できてもその意味の解釈は、登場人物の人間関係や各人の心情など場面ごとの文脈の解釈によるので、その点を意見交換するにも掲示板は役立っている。視点が広がったり多様な視点で見ることに気がついたりしている。

そして掲示板は、「集団の記憶装置」(塚本、2000、p.113)として、会話の書き起こしや非言語メッセージの記述を保存しておくだけでなく、それをもとに意見交換したり、さまざまな人の意見を時間軸で追って参照しつつ自分の案を推敲したりするのに適していた。

これらの結果から、7、8分のビデオを視聴し、ドラマの流れに沿って言語と非言語メッセージの関係を解釈するには、インターネット上の掲示板が有効であることが伺える。

一方、3週間という期間の後半に初めて掲示板を見て参加しようとする、グループに

よっては、役割分担がすでに決まっており、参加しにくくなっていたようだ。自己紹介で終わり、意見を述べることもなく、共有している会話の書き起こしを利用することになるので、不公平感が生まれたり、逆に本人が、後ろめたさを感じたりしている。

フォーラムでは、意見交換するように指示したが、結局、非言語メッセージのいくつかの異なった解釈の意見が提示され、何人かの賛同者が現れるくらいで、否定意見を出して賛否で議論するところまでは至らなかった。対面ではないうえ面識がないものもいるので否定的な意見を書きにくいということもあったようだ。今後は、各班による掲示板の利用状態も含めて考察する必要があるだろう。

6. 質問紙調査の結果

質問紙調査は、レポート提出後の授業で実施したため、そのときに出席していた履修者数になっている。回収できた質問紙数は、183人分（男性101人、女性82人）であり、記入漏れが一項目でもあったものを除くと169人分（男性89人、女性80人）となった。

6.1. 視聴問題

掲示板利用で最も注意すべき点は、履修者が、コンピュータにアクセスできず、視聴できなかった状況がなかったかを把握しておくことであろう。

質問紙調査項目のうち「ビデオがうまく視聴できなかった」の平均（標準偏差）は、5段階評価で1.96（1.207）で全項目の中で最も低く、学期中も全く視聴できないという問題は、発生していなかった。大学のコンピュータで視聴する場合、コンピュータの利用者が一時的に重なりすぎるとインターネットへのアクセスに時間がかかり、視聴しづらいということが、起こりうる。しかし、レポートは、3週間の期間をかけて取り組むものなので、一時的な視聴トラブルがレポートの結果を左右するとは、考えにくい。

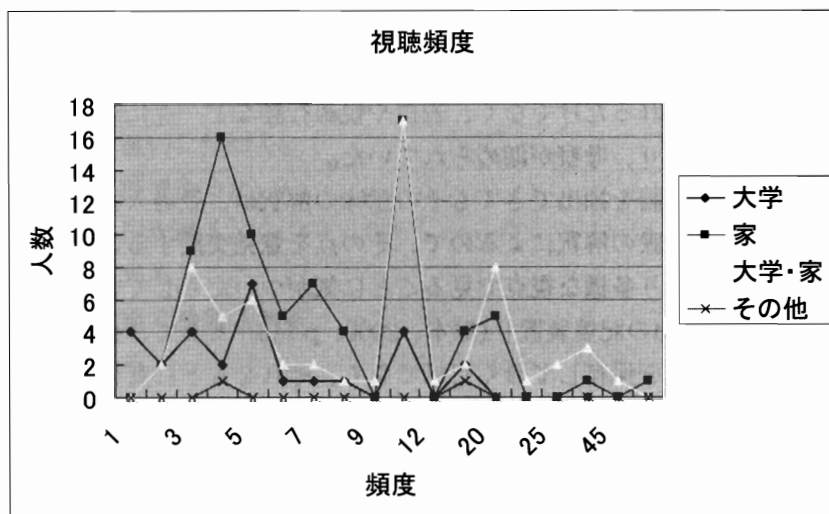


図1 視聴頻度と場所

履修者の視聴数は、最高50回、最低1回、平均9.18 (7.736) 回、である。使用したパソコンの場所と、視聴頻度の関係は、図1のとおりで、家または大学と家の両方で作業した履修者が、視聴頻度が多い傾向にある。

6.2. 課題の適切性

質問紙調査の結果、「非言語コミュニケーションの重要性」がわかった履修者は、課題後、「コミュニケーションに興味」を持つようになっている。二項目間のピアソンの相関係数は、 $r = .7460$ で、有意水準 $p < .001$ で正の強い相関があることが検証できた。

また、「掲示板の意見は参考になった」と考える履修者は、「グループ作業は、レポートを書くのに役立った」と考えており、「非言語は重要」と捉え「コミュニケーションに興味」をもった。それぞれの項目のピアソン相関係数は、 $r = .5143$, $r = .5607$, $r = .4396$ 、であり、有意水準 $p < .001$ で相関が認められた。

さらに 6種類の「ビデオの内容」は、「長さもちょうど良く」、「非言語の重要性」や「コミュニケーションに興味」を持たせるのに役立ったといえる。それぞれのピアソン相関係数は、 $r = .5298$, $r = .5840$, $r = .5496$ 、であり、有意水準 $p < .001$ で相関が認められた。

以上から、レポートにした課題のビデオ視聴は、内容、長さともに適切であり、履修者に非言語の重要性を理解させ、コミュニケーションに興味を持たせることができたといえよう。また、掲示板利用は、意見を参考にしたり、グループ作業をするのに適していた。

7. 非言語コミュニケーションに関する教育の工夫と限界

電子メール、携帯メール、掲示板での書き込みなどでは言葉が残り、残るからこそ読み手は言葉のみと対峙してしまい、その後の相手と自分の気持ちの変化や状況を考慮しないため誹謗中傷や悲惨な事件が堪えないのではないだろうか。人間のコミュニケーションは、言語だけで成り立っているわけではなく、非言語コミュニケーションが重要な役割を担っていることを知識として理解させるだけでなく、実感として感じ取らせる必要がある。メイナード (2001) は、「ロゴスの言語学」を超えた「パトスの言語学」を提唱している。「ビューティフルライフ」他のテレビドラマを題材に言語学からの視点で分析し、広義の感情表現を「感情ことば」として捉え、「考える主体」のみならず「感じる主体」を「感じる相手」との言語による相互行為から浮き彫りにした。「コミュニケーション論」の扱いは、言語はデジタル、非言語はアナログと二分し全く別のもののようにして教える傾向が強いが、情意をどのように伝達するかには視点を置きコミュニケーションを分析すれば、言語と非言語の密接な関係がさらに明らかになるのではないだろうか。

本研究では、テレビドラマを使用し、言語との関連で非言語コミュニケーションの役割を考察させた。テレビドラマを使用したことで登場人物の心情の変化を追うことが可能となり、多様な非言語メッセージの解釈ができた。しかし、テレビドラマを使用した場合の限界もいくつかある。まず、現実のコミュニケーションでは、常に動的に変化しており、繰り返すことも取り消すこともできない。また、刻々と変わる相手の心情を非言語メッ

セージを手がかりに解釈することになり、心情の真意がわかってから非言語メッセージの意味を理解することは少ない。さらにテレビドラマでは、シナリオがあり、役者が自分のセリフとして変えることがあっても（メイナード、2001、p.22）、演出家との共同作業で演技していることは、確かである。したがって履修者が抽出した非言語メッセージのパターンは、単なる演出の効果であるかもしれない。そのような限界はあるが、テレビドラマは、身近な素材であるため、履修者は興味を持って取り組むことができ、学習には、それも重要な要素だと思われた。

マレービアン（1986/1981）は、西洋社会では、1）近親者の間以外では感情の表現、特に怒りや嫉妬など否定的なものが抑制されること、2）正規の教育過程において、言葉以外のコミュニケーションに関して、はっきりとした指導が行われていないこと、を指摘し、家庭や学校で言語技術ばかりを強調して指導し、言葉以外のコミュニケーションの訓練をなおざりにしていることを憂えている（p.102）。

しかし、本研究で提示したように簡便になったインターネット上の掲示板を利用することで、200人あまりの学生を対象にした授業でも、言語と非言語コミュニケーションの複雑な関係のある程度教授できることが明らかになった。人間関係を重視してドラマを見ることにより、言語と非言語コミュニケーションの関係や非言語メッセージの特徴を解説する能力が高まるのではないだろうか。

特に、掲示板でのグループによる協同学習を促すことで、図書を熟読するだけでは得られない、言語と非言語メッセージの関係の洞察が深まることが考えられる。コミュニケーション行動の解釈に一つの正しい解答があるわけではない（Knapp, 1999）が、協同で作業することにより、個々のコミュニケーション能力が異なっても、どこまでがグループで一致した見解なのかを知ることができ、それが個々のコミュニケーション能力の差を埋める学習につながるかも知れない。それには、対面したことがない履修者同士でも電子掲示板上で意見交換がスムーズにできるようにファシリテータを用意し、3週間という期限を有効に使って課題に取り組めるようにするなどのさらなる工夫が必要だろう。電子掲示板上のドラマを言語と非言語コミュニケーションの関係の視点から分析する力と個々のコミュニケーション能力との関連は、今後の研究課題である。

註

- 1) 本稿は、2008年7月に名古屋外国語大学にて開催された日本コミュニケーション学会第38回年次大会にて口頭発表した内容に加筆修正を加えたものである。
- 2) 本研究で調査した2006年度は、他のカリキュラムの都合上、秋学期（13回）に実施された。

引用文献

- 久保田賢一編著、中橋雄・岩崎千晶（2008）.『映像メディアの作り方』北大路書房。
久保田真弓（2001）.『「あいづち」は人を活かす』廣済堂。
末田清子・福田浩子（2003）.『コミュニケーション学——その展望と視点』松柏社。

- 塚本久仁佳 (2000). 「電子ブレインストーミングの有効性」坂元章編『インターネットの心理学』学文社。
- ナップ、M. L. (1979). 牧野成一・牧野泰子共訳『人間関係における非言語情報伝達』東海大学出版会 (オリジナル出版1972)。
- 西阪仰 (1997). 『相互行為分析という視点』金子書房。
- 古田暁 監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1996). 『異文化コミュニケーション——新国際人への条件』[改訂版] 有斐閣選書。
- ブリブル、C. B. (2006). 『科学としての異文化コミュニケーション 経験主義からの脱却』ナカニシヤ出版。
- ホール、E. T. (1966). 国弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳『沈黙のことば』南雲堂 (オリジナル出版1959)。
- マレービアン、A. (1986). 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫共訳『非言語コミュニケーション』聖文社 (オリジナル出版1981)。
- メイナード、S. K. (2001). 『恋する二人の「感情ことば」ドラマ表現の分析と日本語論』くろしお出版。
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子 (1998). 『異文化トレーニング ボーダレス社会を生きる』三修社。
- ワツラヴィック、P., バヴェラス、J. B., & ジャクソン、D. D. (1998). 山本和郎 (監訳) 尾川丈一 (訳)『人間コミュニケーションの語用論 相互作用パターン、病理とパラドクスの研究』二瓶社 (オリジナル出版1967)。
- Cronkhite, G. (1986). On the focus, scope, and coherence of the study of human symbolic activity. *Quarterly Journal of Speech*, 72, 231-246.
- Ekman, P. (1965). Communication through nonverbal behavior: A source of information about an interpersonal relationship. In S.S. Tomkins & C.E. Izard (Eds.), *Affect, Cognition, and Personality* (pp.390-442). New York: Springer.
- Ekman, P., & Friesen, W.V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98.
- Knapp, M.L. (1999). Teaching nonverbal communication. In A.L., Vangelisti, J.H., Daly, & G.W. Friedrich, (Eds.), *Teaching Communication* (pp.157-170). London: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Mehrabian, A. (1968). Communication without words. *Psychology Today*, II (September), 52-55.